

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2010年4月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



感情の論理 vol.38 「一般常識が生む差別化」

私事です。4月の末に自宅から歩いて2分のマンションに引っ越すことになりました。結婚した時に建てた小さな3階建ての家に住んでいたのですが、末の子供が大学生になったのを機に、女房殿が「ワンフロアの家に住みたい」と言い出したのです。分譲賃貸ですので、備え付けの家具など一切なく、また、自宅はそのままにしておきたいという希望もあり、全ての電化製品と家具を新調することになりました。電化製品だけでもテレビが3台、クーラーが3台、冷蔵庫、洗濯機、照明…かなりの出費です。

先日、女房殿に付き添って大手家電量販店に行きました。おびただしい量の電化製品が並び、その分野に全く疎い私は、何を選んでいいのかわからず戸惑うばかりです。女房殿はお目当ての製品の価格や性能を次々とチェックしています。その手際の良さには感心します。

ところで、綿密に調べはしますが、その量販店で購入することはありません。我が家には20年以上お付き合いをしている「町の電気屋さん」があります。多少高くても、電化製品はそこから購入します。

我が女房殿は物持ちがよく、結婚して27年が経ちますが、冷蔵庫もクーラーも二代目が現役で働いています。故障しても直して使うのが我が家の流儀です。大手量販店では、ちょっとした修理の依頼ができません。(多分、要請には応じてくれるのですが、気が引けるというのが正直なところ。)

その点、懇意にしている町の電気屋さんは、小まめに対応してくれます。すっかり顔馴染みですので多少のワガママは許してくれます。女房殿にとっては、それが気持ちよく、電化製品を長く使うことで節約にもなるのでしょう。

我が女房殿のようなタイプは、思ったほど少数派でもなさそ

うです。その証拠に、我が家がお付き合いしている町の電気屋さんは今も商売を続けています。もし、我が家のような家庭が他になければ、とっくに店を畳んでいることでしょう。

塾は家電製品ではありませんので比較することに無理はありますが、ここに中小・個人塾が生き残るヒントがあるように感じます。少なくとも、大手塾に「小まめな対応」で負けていたのでは話しになりません。

中小・個人塾は店構えや広告宣伝の量では大手塾に勝るとは難しい。しかし、対抗する手段がないわけではありません。我が家のように町の電気屋さんを好む家庭は一定量存在するものです。中小・個人塾の経営者の方は、今がチャンスと考えるべきです。

大手塾は今の時期、大量の新入社員の流入と人事異動で、現場がバタついているものです。(もちろん、全ての大手塾がそうだというわけではありませんが…) この時期にきっちりとした指導をすれば、そのまま差別化になります。ですから、先月号でも同様の指摘をし、今月も重ねて強調しています。

今です!

ゴールデンウィーク過ぎまでがチャンスです。初めて塾に行かせ始めた保護者が、ご近所のお友達とこんな会話をしていることを想像して下さい。

母親A: 今年から息子を塾に通わせ始めたけれど、何だか集中して勉強できていないみたいで…

母親B: 娘が通い始めた塾は家庭学習の方法まで教えてくれて、娘は人が変わったみたいに机に向かうようになったよ。

さて、あなたの塾はどちらを目指しますか?

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2010年4月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouku.co.jp/>

業界
TOPICS

vol.13 「半世紀を超える塾と消えた塾の違いとは？」

その一「揺るがぬ教育理念が揺らいだ時・・・」

P塾長は「金の皿、銀の皿、銅の皿、それぞれの皿で食べるものは皆同じ」という揺るがぬ『寛容な』教育理念を持ち、学力の上下、家庭の所得の高低、親の教育意識の強弱などに捉われない教育方針で生徒たちをその個性に応じて指導していましたが、若い母親のクレームが増えるに従い「やっていられなくなった」と愚痴をこぼすようになりました。

「何が嫌かという、妻の言いなりになっている夫たちが子供の教育について無関心になって、教育費の単なるパトロンでしかなくなったことだ・・・」

生徒数も利益も絶頂の時にもかかわらず、P塾長は看板を下ろして田舎に隠居、斜面の畑から獲れた葡萄でワイン作りに励む毎日を過ごすようになりました。

塾長の信念や教育理念を全く理解しないような若い母親たちの関心は、ただ自分のマスコットであり装飾品である子供のことだけにあり、上からの説教などは聞き入れなかったのです。

「自由主義の生き方をしているというが・・・」

本当の自由な心とは『認める』ということなのだ」

これが塾長の最後に残した言葉でした。

子ども手当での支給により、教育費のパトロン役も外される幸運？な夫たちも増えるのかもしれませんが。

その二「俺だけが億万長者」

時はまさに塾バブル全盛の80年代。

S塾長が会議で言ったその言葉に、自分の父親の死に目にも遭わず働いた大幹部の喉下が一気に乾きました。

「こんな人に仕えていたのか？」

相手に対して悔しいというよりも自分自身に対して情けない気持ちで一杯でした。

「今後はもらう給与の分だけ働けばいい」

自ら『窓際族』に退いた大幹部の精神は、次第にボロボロになっていき、終いには『希望退職』をするまでになりました。それに伴い、塾の経営も縮小傾向になり、いくつもの新興勢力に追い抜かれ、退職金を支払うほどに利益も激減していきました。

「退職規定を変えろ！」

塾長が叫んでも、時すでに遅し。

塾長は経営悪化にもかかわらず贅沢な生活を改めようとせず、夜逃げ同然に会社から姿を消したそうです。「飛ぶ鳥跡を濁さず」という日本の美徳が消えつつあるのは残念です。

「耳目はあざむかない。判断があざむくのだ」と、誰かが言いました。

その三「低価格戦略で潰れた塾」

どんどん迫ってくる低価格戦略の塾に対して、名門R塾も無料体験と会員弟妹の割引、友人紹介で図書券配布などを実施するようになりました。しかし、いくらやっても生徒数は増えず、既存校舎の生徒数が減り、その単価の高さゆえに採算効率が急激に悪化しました。

「生徒一人あたりの単価の高い進学塾は、生徒数激減が命取りだ」
わかっているにもかかわらず辞められない戦略・・・

自社ビルを売却してテナント募集すると、あろうことか、ライバル塾が入居してきて、ビルの中は塾銀座に・・・

生徒たちは迷宮に入り込んだかのように、他塾に間違えて顔を出す。

「自ら世紀末をつくってしまった！」

この話を聞いて、「価格戦争そのものには少しは価値があるだろうが、価格破壊で勝つ塾は無いと知っても価格戦争をやれば、業界スタンダードもモラルも無いのが塾業界だと世間に認知されてしまう・・・」と、適正価格で経営維持する謙虚な塾長がつぶやきました。

だからこそ、業界再編も加速されていくのでしょうか？

人間関係に学ぶ。

第一回「吉田茂と白洲次郎」

"日本の英国紳士たち"

二人に共通していることは、「英国での生活を愉しんだ」ということです。そして、二人とも、自分の信念を持ち、自分の言葉で考え議論する英国紳士風の日本人でした。

しかし、「気骨のある明治人が好きだ」と吉田茂は言い、英国的な生活スタイルと明治の気骨ある考え方を併せ持つ不思議な魅力にあふれた「ワンマン」でした。

一方の白洲次郎は、吉田茂を「オヤジ」と呼び、まるで吉田の放蕩息子のように、戦中戦後を自由奔放に生きました。

「好き嫌いがはっきりしている」白洲でしたが、戦時中に農業に従事し、収穫した野菜を無造作に知人宅に放り込んではすぐに消えてしまうという「奇行」を続けていました。わざとらしい優しさや親切は嫌いで、不器用でも真剣に生きている人間が好きでした。

"風来坊"

吉田茂は外交官から政治家へと進みましたが、軍部から目をつけられ、英国大使として日本から遠ざけられました。それが結果的に首相へとつながりましたが、あまりにもワンマン過ぎて、ひと仕事を終えた彼を世間は表舞台から引きずりおろしてしまいました。

現役時代は「難局を乗り切ってこそ仕事のしがいがある」と元気ハツラツとした仕事ぶりを見せ、引退してからは自ら「風来坊」と称して悠々と閑居していました。

"ぶあいそう"

白洲次郎は、いよいよ戦争の気配が濃厚となったとき、「戦争になったら食糧が大事だ」と郊外に農園を構え、せっせと畑仕事に精を出しました。終戦後、GHQとの折衝で活躍しはじめると、「従順ならざる唯一の日本人」というレッテルを貼られるほど、ズケズケと自分の考えを主張する日本人として有名になりました。

「物事の筋を通し、自説をまげぬ強靱さの半面、人間的な優しさや余裕のあるニーモアを持つ」白洲は、連合国にも

友人を多く持ち、日本人離れしたお洒落と語学力で、危機に直面した昭和史で際立つ仕事を果たしました。彼の寓居は「ぶあいそう」という名前でしたが、これは「武相荘」という当て字で、何か吉田の「風来坊」につながるものがあると感じられます。

"アイデンティティ"

講和会議のあと、演説する吉田茂の草稿が英語だったものを白洲次郎はわざと日本語での演説に切り替えました。「英語がしゃべれるとかしゃべれないという問題ではなく、日本の国の代表なら日本語で世界に発信すべきだ」という考え方によるものでした。このあたりにも、決して米国の圧力に屈しない、国を愛する日本人としての「従順ならざる」一面が出ていますが、このような白洲の性格が吉田も気に入っていたのでしょうか。

取材/記事 : 新教育産業監修・月刊私塾界記者 千葉誠一

吉田茂(よしだ・しげる 1877~1967)

学習院、東大を経て外務省に入り、中国やイタリアなどに勤務。外相に内定していながら、自由主義を軍部に嫌われ入閣せず、駐英大使となる。終戦の年、敗戦必至の形勢を説いた内奏文が憲兵に押収され、投獄された。憲兵が書生として住み込んでいたのだが、恨まず、戦後謝罪した元憲兵の就職を世話したという逸話がある。

昭和28年の衆議院予算委員会では、社会党の議員に対して「ばか野郎」と叫んで委員会が紛糾し、吉田は謝罪したが、懲罰動議で吉田内閣は解散。『バカやろう解散』として有名。

最後は造船疑獄で指揮権発動したが、すでに権力は凋落し、世間からも飽きられていた。

昭和42年、90歳で逝去。戦後初の国葬。

白洲次郎(しらす・じろう 1902~1985)

兵庫県芦屋出身。ケンブリッジ大学卒業。英国では、ペントレーやブガッティを乗り回すオイルボーイで、英国貴族と終生の交わり。正子と結婚し商社に勤務するが、大半を外国で暮らし、吉田茂のいた英国大使館が定宿となる。

戦中は鶴川村で農業をするかたわら、吉田の「ヨハンセングループ」の一員として活躍。戦後は終戦連絡事務局の参与に就任し、通訳も兼ねGHQとの折衝で活躍。貿易庁長官を経て東北電力会長、大沢商会会長などを歴任、サンフランシスコ講和条約締結の全権団にも同行。

1985年、83歳で逝去。



サンフランシスコ講和会議へ向かう機上の吉田茂(右)と白洲次郎

ご意見・ご要望をお待ちしています。知りたい「テーマ」や内容などについて教えてください。できるだけ対応したいと思っています。ご連絡はこちらまで: magazine@chuoh-kyouku.co.jp